第20回 全国川サミットin長岡

発行　第20回全国川サミットin長岡実行委員会
〒940-8501　新潟県長岡市幸町２丁目１番１号
【事務局】○長岡市市長政策室政策企画課
ＴＥＬ：0258（39）2204　ＦＡＸ：0258（39）2272
E-mail：info@city.nagaoka.lg.jp
○長岡市土木部河川港湾課
ＴＥＬ：0258（39）2233　ＦＡＸ：0258（39）2273
E-mail：kasen@city.nagaoka.lg.jp

第20回 全国川サミットin長岡

絆 ～ 川は流れ、地域をつなぐ ～

報　告　書

全国川サミット連絡協議会

目　次

Ⅰ　開催概要

1）全国川サミットとは …… 1
①　参加自治体 …… 1
②　全国川サミットのこれまでの開催地 …… 2

2）長岡市開催の意義 …… 3

Ⅱ　実施内容

1）８月３日（水）－第１日目－
①　「信濃川大河津資料館」・「大河津新可動堰」見学 …… 4
②　全国川サミット連絡協議会総会 …… 5
③　国土交通省講演 …… 6

2）８月４日（木）－第２日目－
①　オープニングセレモニー …… 7
②　全国川サミット in 長岡 開会式 …… 8
③　事例発表　ＮＰＯ法人 新潟水辺の会 …… 9
　　事例発表　大地の会 …… １１
④　基調講演　松岡 達英 氏 …… １３
⑤　首長サミット …… １６
⑥　サミット宣言・サミット旗受渡式・次期開催地あいさつ …… ２５
⑦　展示等 …… ２７

Ⅲ　第２０回全国川サミット in 長岡を振り返って …… ２８

Ⅰ　開催概要

1）　全国川サミットとは

一級河川と同じ名称または一級河川の流域にある全国の自治体が、「全国川サミット連絡協議会」を組織し、川がもたらす恵みや人々との関わりを生かしながら、川と共存するまちづくりを進めることを目的に、加盟自治体が持ち回りで開催しています。

平成４年富山県庄川町（現砺波市）で第１回サミットが開催され、今回で２０回目となりました。

①　参加自治体

《全国川サミット連絡協議会》

	秋田県横手市
	福島県湯川村
	茨城県取手市
	群馬県みなかみ町
	東京都江戸川区
	岐阜県揖斐川町
	岐阜県白川町
	兵庫県加古川市
	新潟県長岡市

《信濃川流域自治体》

	長野県中野市
	長野県川上村
	新潟県新潟市
	新潟県三条市
	新潟県小千谷市
	新潟県加茂市
	新潟県十日町市
	新潟県見附市
	新潟県燕市
	新潟県魚沼市
	新潟県南魚沼市
	新潟県津南町

②　全国川サミットのこれまでの開催地

回　数	開催地	テーマ
第１回	富山県庄川町	川は未来に夢はこぶ
第２回	北海道鵡川町	きらめきリバータウン ～川と人の未来を求めて～
第３回	静岡県大井川町	夢と希望あふれる川づくり ～川は命、未来の子供たちへ引き継ごう～
第４回	兵庫県加古川市	川はともだち ～ひと・まち・川　ちょっと素敵な物語～
第５回	徳島県那賀川町	未来へ語ろう！　私たち川家族
第６回	秋田県雄物川町	川がつなぐ「ひと・まち・こころ」
第７回	宮崎県北川町	思い出いっぱい　不思議がいっぱい ～川を彩るホタルの光が子供たちへの贈り物～
第８回	愛媛県肱川町	21 世紀へのメッセージ ～それは川から始まる～
第９回	三重県宮川村	川に愛される人になりたい ～ちょっと素敵な川家族～
第 10 回	兵庫県揖保川町	歴史に学び明日を見つめる川づくり ～ともに創ろう 川の未来 水の未来～
第 11 回	東京都江戸川区	暮らしにとけ込む、にぎわいの川 ～都市の中の川を考える～
第 12 回	岡山県加茂川町	森と川が伝える　ふるさとからのメッセージ ～水は生命の源～
第 13 回	奈良県十津川村	みんなで考えよう！　河川環境
第 14 回	兵庫県猪名川町	清流とともに暮らす ～ええやん猪名川５０年～
第 15 回	岐阜県揖斐川町	川面に暮らし　川とともに生きる
第 16 回	東京都江戸川区	川の恵みとその脅威
第 17 回	群馬県みなかみ町	川を活かしたまちづくり・川と交流
第 18 回	秋田県横手市	川がはぐくむ「ひと・まち・こころ」 ～山と川のあるまちから～
第 19 回	兵庫県加古川市	川はともだち ～未来につなぐメッセージ～

２）　長岡市開催の意義

平成４年から始まった全国川サミットは、平成２３年に２０回目を迎え、新潟県長岡市で開催されることとなりました。

長岡市は、日本一の大河・信濃川が市内中央をゆったりと流れ、市域は越後山脈に連なる守門岳から日本海まで広がる人口２８万人のまちです。平成１７年度に９市町村と、平成２１年度に１町と合併し、長岡まつりや山古志の牛の角突き、寺泊の海の恵み、四季折々の自然など、個性ある１１の地域の魅力が輝いています。平成１６年の中越大震災をはじめとした相次ぐ災害にも、「米百俵」の精神を受け継ぐ市民の力で復興を成し遂げました。長岡市は、総合計画で定めた「前より前へ！長岡　人が育ち地域が輝く」を合言葉に、「市民力」「地域力」そして「市民協働」の力を活かし、シティホールプラザ「アオーレ長岡」、「子育ての駅」など全国にさきがけたまちづくりを進めています。

今回の全国川サミットは“絆　～川は流れ、地域をつなぐ～”をテーマに、全国の自治体からの参加者と市民が、川と地域の関わりや川との共生について考え、交流を深めること、長岡市内を流れる大河・信濃川、清流・魚野川の恩恵を再認識し、流域市町村との連携を深めることを目的として開催しました。

８月４日　第２０回全国川サミット in 長岡　会場
えちご川口交流体験館「杜のかたらい」

Ⅱ　実施内容

１）　８月３日（水）－第１日目－

①　「信濃川大河津資料館」及び「大河津新可動堰」見学

新潟県燕市内にある、越後平野を水害から守っている大河津分水を紹介するため、信濃川大河津資料館を訪れました。

続いて、平成 23 年 11 月に通水予定の大河津新可動堰の工事現場を見学しました。

↑
← 信濃川大河津資料館見学
↓

← 大河津新可動堰見学

② 全国川サミット連絡協議会総会

長岡市にある長岡グランドホテル４階「蒼柴の間」を会場に、参加自治体の代表者が出席し、全国川サミット連絡協議会総会が開催されました。

以下の報告事項及び協議事項について審議され、すべて満場一致で承認されました。

なお、今後の全国川サミット開催予定については、平成２４年度の第２１回サミットの茨城県取手市での開催が確認され、さらに第２２回サミットを長野県川上村で開催することが承認されました。

＜次第＞

会長挨拶　長岡市長　森　民夫
来賓祝辞　国土交通省北陸地方整備局長　前川 秀和 氏
　　新潟県副知事　大野 裕夫 氏
来賓紹介　国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長　小池　剛 氏
　　国土交通省北陸地方整備局河川部長　田所　正 氏
　　国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所長　清水　晃 氏
　　新潟県長岡地域振興局長　鈴木　政義 氏

○ **参加状況報告**
○ **議題**
◇報告事項
・第１号　第 19 回全国川サミット in 加古川事業報告について
・第２号　第 19 回全国川サミット in 加古川収支決算について

◇協議事項
・第１号　第 20 回全国川サミット in 長岡事業計画（案）について
・第２号　第 20 回全国川サミット in 長岡収支予算（案）について
・第３号　第 20 回全国川サミット in 長岡共同宣言（案）について
・第４号　今後の全国川サミット開催予定について

③ 国土交通省講演

国土交通省北陸地方整備局長　前川 秀和 氏から「平成２３年７月新潟・福島豪雨の被害状況」について報告をいただきました。

「平成２３年７月新潟・福島豪雨」の降雨量や被害状況を、平成１６年に起きた豪雨災害との比較で説明いただきました。

また、平成１６年の水害以後に実施した、河川改修等の整備の成果について説明をいただきました。

国土交通省　北陸地方整備局長
前川　秀和 氏

続いて、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長　小池 剛 氏から「最近の河川行政報告」と題しまして、ご講演をいただきました。

平成２３年３月に発生した東日本大震災について、津波の影響や地盤沈下の状況、河川の被災状況などについて説明をいただきました。

次に、今後の復旧計画について言及されました。災害に強い国土構造への再構築というような、地域の特性を考慮したハード・ソフトを組み合わせた、防災まちづくりのデザインを進めているそうです。

そして、水害サミットの紹介がありました。近年頻繁に起きている災害から命を守るためには、みんなで情報交換を行い、それを通じて防災などについての認識を広めていくことが大事であるとお話いただきました。

国土交通省　水管理・国土保全局
河川環境課長　小池　剛 氏

総会の様子→

2） ８月４日（木）ー第２日目ー

第２０回全国川サミット in 長岡
会　場：えちご川口交流体験館「杜のかたらい」
参加者：１８０人

① オープニングセレモニー

川口あおり太鼓

【紹介】

川口あおり太鼓は、昭和５９年に郷土芸能として作曲され、郷土の自然、文化、人々の営みを表現し、勇壮な連打の「序曲」から始まり、「天地躍動の春」「炎天の夏」「稔りの秋」「闘う冬」の５部で構成され、雪国の四季折々の文化を奏でた勇壮にして躍動感溢れる太鼓です。当日は時間の都合により２部構成で演奏を行いました。

太鼓の演奏は、川口地域の子供たちが代々継承しており、太鼓を通して、子ども達の豊かな情操の育成にも大きく貢献しています。

② 全国川サミット in 長岡 開会式

○来賓あいさつ

・国土交通省北陸地方整備局
　信濃川河川事務所長　清水 晃 氏

・新潟県長岡地域振興局長　鈴木 政義 氏

○来賓紹介

・国土交通省北陸地方整備局河川計画課　課長補佐　南雲　克彦 氏

③　事例発表

ＮＰＯ法人　新潟水辺の会　事務局長　加藤　功 氏

演題「かつてのように鮭が遡る、信濃川・千曲川へ」

私たちは記憶される美しい水辺の保全や再生、創造を目指し、河川の水質調査や通船川での川ゴミ清掃、そして鮭稚魚の「市民環境放流」活動などをやっております。

中流域の方はご存じだと思うのですが、昔はここには鮭が多く遡上しておりました。しかし、戦前の国策により、宮中ダムおよび西大滝ダムが作られたことで、水量が少なくなって、残念ながら鮭の遡上がなくなりました。信濃川で発電された電気により、山手線の４分の１の電気を賄っておりますが、残念ながら東京都の方はその辺を知らないというのが現状です。発電用には３１７トンの水が流れますが、残念ながら今までは川には維持流量の７トンのみの時代が長く続きました。上流部には非常に水があるのですが、本流の信濃川はせせらぎの川となっていました。今現在は大分流れています。これまでの維持流量の７トンが４０トンから１００トンの水に改善されつつあります。川の流水量が減少した結果、海の栄養分を山や川に運ぶ重要な物質循環の担い手だった鮭の遡上がなくなり、川の機能低下により生態系が悪化した状態になっております。

長野県では、昭和５６年度から平成１５年度まで２１年間で１億６，０００万円の予算を使って、鮭の稚魚８９９万尾を放流してきました。しかし、長野県まで帰ってきたのは２１年間の累計で４８尾でした。我々の鮭稚魚の「市民環境放流」は産業放流ではなく、市民の目線での放流を目指しております。長野で放流された鮭の稚魚が、安全に日本海まで降下し、成魚が長野へ遡上できる環境を整えて、本来の川の姿を取り戻すことを目的としております。

ただ、我々は川に鮭を呼び戻すことだけを目的としているわけではありません。あくまでも鮭は一つの指標としてやっております。これに関しては、沿線の市町村などから鮭基金をいただき、鮭稚魚「市民環境放流」を行っております。２００７年春には、５万５，０００尾の放流を行いました。２００８年度は１３万尾、２００９年度は２０万尾、２０１０年度は３０万尾、今年も３０万尾、合計約１００万尾の稚魚を放流しております。

ご存じのように平成２１年度のＪＲさんの不正取水の発覚によって、水利権が停止されました。その結果、信濃川にはかつてのように水量が戻ってきました。そして、西大滝ダムにも２００９年に２尾。少ないようですけれども、我々は非常に画期的だと思っております。２０１０年度には３尾。そして、２０１０年１０月２０日、６５年ぶりに新潟市の信濃川河口より２５３キロメートルの上田市に鮭のメスが発見されました。

私たち新潟水辺の会は、毎年５００尾の鮭が遡る信濃川・千曲川を目標に活動を行っております。その中で、いろいろな提案をさせてもらっています。例えば、西大滝ダムに流れる水の量です。平均で約２００トンくらいですけれども、今まで川に流れていたのは、維持流量として０．２６トンの時代がずっと続いておりました。東京電力さんのほうで、昨年度に今までの０．２６トンから２０トンへの水利権の更新申請が行われました。これはある程度、私たちは評価しているのですが、もっと多いほうがいいと思っております。

また、同じ量を流すなら、２０トンをもう少し変化させてもいいのではないかと思っております。例えば、鮭の稚魚放流のときには多く。それから、川を使ってのラフティングの時期とか、それから鮭が遡上する時期。このように一つ一つ同じ量を流すのだったら、変化をつけていただきたく、東京電力さんには、我々のほうから提案しております。

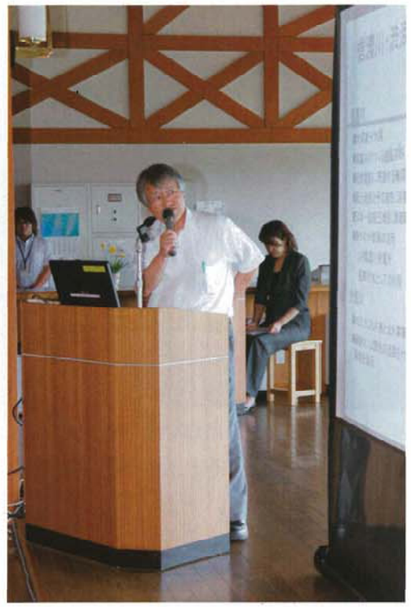
そのほかの提案としまして、将来、一番問題なのが西大滝ダムなのですけれども、その魚道の構造を変えてもらいたいと。水門なのですが、それを一門、魚道にそっくり変えてもらうような提案をしております。そうすれば現在の０．２６トンから大幅に水量を回復できるだろうと。なおかつ、それをエレベーター魚道にして、洪水時には完全に水門を開くような形を取りたいというように提案しています。この例としては、北海道に二風谷ダムというところがありまして、そこでエレベーター魚道というものがあります。また、全体を上流部に移動することで、鮭がダム前にきた時は、魚道が見つけやすくするというような提案をしております。

また、地域との共生の観点から、鮭の発眼卵からの育生と稚魚放流を提案しています。目的は、千曲川沿川の子供たちに、身近な水環境を大切にする心を持ってもらうとともに、地球温暖化など大きな問題を考えるきっかけとしてもらいたいということです。子供たちに、鮭の稚魚の発眼卵から育ててもらって、それを放流するということです。

最後になりますが、川の恵みとは誰のものなのか。やはりその点を考えて、自然産卵による河川の復活を訴えていきたいと思います。

大地の会　会長　小川　幸雄 氏

演題「ダイナミックに変動を続ける信濃川について学ぶ」



大地の会は、長岡市越路地域を拠点に大地の成り立ちと私たちの生活との関わりを中心に学んでいる団体です。平成 16 年の中越地震では地盤によって地震の被害に大きな差があることを知り、地学の分野から「防災まちづくり」への取り組みを強化しています。

長岡市の中心部を日本一の大河信濃川が流れています。信濃川やその支川である渋海川、魚野川を活動のフィールドとしていますが、その渋海川が削る崖に褶曲構造の向斜軸が見える全国的にもめずらしい露頭（地表に現れているところ）があります。大地の会ではこれを専門家に協力する形で詳細なスケッチをつくりました。このスケッチは、当時の教育委員会により現地に看板として立てられたのですが、私たちにとりましては活動のシンボルであることから、設置・観察場所の草刈りを行い、いつでも多くの方々から観察していただけるようにしています。

会の設立10年目には、私たちが今まで学んできたことや野外観察会で受けた驚きと感動、「なぜここに川が流れてこの崖を削るか」は地層を読み解くことで説明されるということなどを、地域の人々に伝えようと「地学マップ」つくりに取り組みました。大地の成り立ちを読み解く鍵になる地形や地層、先人が地形を利用して私たちの生活を豊かにするためにつくってきたものを「地学資源」とし、調査を行い、そこに解説を加えたものです。タイトルは、この地域が 500 万年以降の地質で成り立つことから「発見！越路の大地 500 万年のドラマ」としました。このマップの印刷間際に中越地震が発生し、この地域も大きな被害を受けたことから、急遽、中越地震とその被害を書き加え平成 17 年に発刊しました。

平成 16 年の中越地震は、私たちが今まで経験したことのない大きな地震でした。大きな余震が続く中、地域の方々から「一体、地下で何が起きているのか」「いつまで余震が続くのか」「なぜ同じ地震なのに、隣の家とは被害が違うのか」という質問が多く大地の会に寄せられました。

この声に応えようと、緊急報告会を計画しました。地震直後から被害調査を行っておられた大地の会の顧問の先生方からは「調査途中であり、発表する段階ではない」と言われましたが、無理にお願いして 10 月 23 日の地震発生から 2 か月とたたない 12 月 19 日の緊急報告会にこぎつけました。大きな被害に遭い避難中の方、地震の後片付けが終わらない方等々、会場を埋め尽くす 140 名もの方々の参集があり、熱心な質疑応答が行われました。

大地の会では中越地震の体験集を「語りつぐ 10.23　ふるさとの大地と中越地震」としてまとめ、平成 19 年 2 月に発刊しました。大地の成り立ちを学んでいる大地の会ならではの体験集との評価を頂いているところです。

地学離れという言葉が聞かれますが、会の新たな取り組みとして、小学生を対象とし、石を切ってみがく「岩石加工講座」を夏休みに開講しています。また、地形図や衛星写真に国土地理院が公開している 2mメッシュの標高データを重ねた立体地図・立体写真を作成し展示を行っています。私たちの住んでいる地域の地形を立体的に見ることで起伏がよく分かり、どんな災害が起きやすい地域かを市民に意識してもらうことを目的としたものです。

越路地域でも昭和 53 年 6 月に渋海川が破堤氾濫するという大きな水害を経験しています。地震や水害などの自然災害は、その地盤の形成過程が災害被害に大きく関係しています。ただ、地質を読み解き地盤の成り立ちを知ることは、一般の市民にとって非常に難解なことだと思っています。それを一般市民のみなさんに分かりやすく伝えていくことが私たち大地の会が「防災」に果たせる役割と認識して、これからも活動していきたいと考えております。

④　基調講演
自然科学絵本作家　松岡　達英 氏
演題「川が教えてくれたもの」

私は、いろんな絵本を今までに１００冊以上作ってきていますが、そのほとんどが「自然」をテーマにしたものです。それは小さいときから自然が大好きだったからです。僕の絵にはキャラクターと言うか、松岡達英の作品の絵というのは、だいたいこんな絵だというのがないのです。それはあらゆるものを描きたいという気持ちがあるからです。

例えば『百年図鑑』という本は、日本各地の好きな自然のところに行って、一月ワンテーマで自然を見てきて、それをリアルに描きました。『ぴょーん』という本はリアルではなくコミカルな感じで描いています。これはユタ州での恐竜の取材から飛行機で帰る中で、僕は飛行機が大嫌いなので、エアポケットが無いようにと願いながら乗っているのですが、その時にたまたまエアポケットがあって、ギクッとした時に出版社から頼まれた、子供のための本のアイデアが浮かんだのです。それがこの本で「かえるがぴょーん」こういう感じなのです。ただこれだけの繰り返しなのですが、なんとこれが５０万部を突破しそうです。だからこの小さなかえるに我が家の生活の全てが掛かっています。各市町村のファーストブックといって赤ちゃんが生まれると本を配るのですが、それに全国的に採用されている本でもあります。

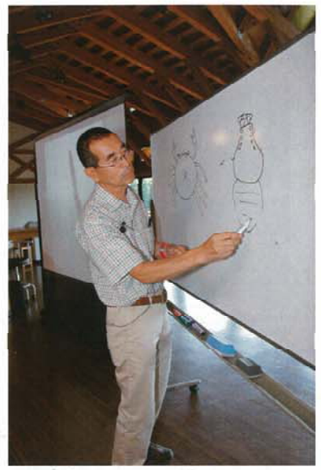
『野あそびずかん』という本は、川口町の宝物ということで作りました。川口の自然をずっと観察して作った本です。この本の中には、僕の川口にあるアトリエの絵もあります。八海山、中ノ岳、駒ヶ岳がこうやって見える場所にアトリエを構えています。そこで自然を観察しながら仕事をしています。この本の中には地元の人が出てくるのです。今日、ここの会場にいらっしゃっているＭさんという人も出ています。

このようにしてずっとやってきているのですが、僕が自然を好きになった原因の一つが、川です。長岡市の福島江という川のそばで僕は育ったのですが、そのとき、まだ川は護岸されていなかったのです。今も樹齢１００年近い桜がたくさんあるのですが、護岸されたことでだいぶ弱ってきていますね。あれを見ると僕は昔を思い出して悲しくなるのですが、護岸されていないときは、いろいろな生物がいました。
僕は福島江で散々勉強したのです。

今、カニをちらっと書きましたけれども、やっぱり川関係者の方々だから相当川の知識はあると思うので、一つテストやりますね。（しばらく絵を描く）。こちらがカニで、こちらはクモなのですが、ここにハサミ、足を描ける人いますか。当然、描けなければいけないですね。

まず、カニをどうぞ。ハサミを入れて足を。下手でもいいです。では、クモが描ける人。クモは目が八つぐらいあるのですね。

（来場者に絵を書き足してもらう）



これは根本的に間違えています。どこが間違っているか。まず、本数です。４対なければならない。クモは昆虫ではないから足は６本ではなく８本です。それとクモの場合、頭部に足が８本あるのです。頭部に足がある動物がクモなのです。カニも頭部に足があります。カニをひっくり返すとこういうものがついているでしょう。これは元々おなかだったのです。カニの若いときはこうやってぶら下がっていたのです。クモとカニは同じなのです。カニを食べてるということはクモを食べてる。水の中というのは非常に浮力があって、重い体を支えられるので、水の中の生物は肉がつきます。陸上の生物は素早く動くために肉を付けられないため筋肉だけとなる。クモはシャープな体をしていますが、実はカニと同じ仲間です。カニは今、８本、ハサミを入れて10本の足がついています。これは大正解です。タラバガニは一対ないのです。実はタラバガニはカニではなくて、ヤドカリなのです。

ここに描いたように、僕が今日、言いたいテーマというのは、川ももちろんそうなのですが、身近な生物を知るということは、自分たちが生きている地球の仲間を知ることなのです。最近はいろいろな災害がありますね。水だとか、津波だとか、地震とか、それは地球にはそういうことがあって当然なわけです。地球上にはびこっている生物はすべて、地球と闘わなくてはいけない。地球というのは、それくらいしたたかな星なのです。だから、地球を大切にだとか、環境だ、自然を大切にだとか言っていないで、いかに闘うかと言うこと。それも、ほかの生物と連携をとって闘わなければいけない。人間一つでは弱いから。だけれども、連携取っているよね。人間のためにいろいろな食べ物になってくれているわけです。生物は全て。こういう協力を仰ぎながら、地球と闘わなくてはいけないのが人間なのです。リーダーとして。地球というのはものすごく忙しい星で、真ん中には原子力発電所のものすごく大きい奴があるのです。これがボコボコ動き回っている。これはすなわち太陽と同じです。太陽はそれ自体で核分裂しながらエネルギーを出しているわけです。これと同じものがここに入っている。しかもブツブツ上がってくるわけです。上がってきて火山になってエネルギーを出しているわけです。

そのように、地球はとにかく忙しい。人間のことなど構っていられないわけです。人間は地球にくっついた、着生生物みたいなもので、しかもそれが１日一回回転しているわけでしょう。１日一回回転している表面の早さというのは、時速 1,700 キロです。みんな気がつかない。空気も一緒に動いているから、大気も一緒に動いているから気がつかない。そして、これが１年に一回、太陽の周りを回っている。超特殊宇宙船であると。それにみんなが乗っていて、ごく当然のようにやっているけれども、宇宙旅行をしているというこ

とに気がついていないのです。そういうのが地球で、ここまで言うと地球というのは忙しすぎちゃって、人間のことを考える必要がないと。だから、人間も地球のことを考えることなく、とにかく必死になって地球と闘いながら生きなければいけない。これから何があるかわからないので。だけれども、予測されるものはけっこうあるし、今こう見える山なんかも少しずつ動いたものが連なっているのです。あらゆる生物は発生すると絶滅する。人間もやがて繰り返すのです。恐竜は人間よりずっと長い歴史を持っているのだけれども、滅びたでしょう。情け容赦ないよね。この星は。だから油断できない場所だということを、まず覚えておいていただきたい。

次に、今日のテーマの川ですけれども、僕は川がすごく好きで、魚野川が流れていますけれども、魚野川と信濃川の合流点に、川口には特別天然記念物になるような珍しい昆虫がいます。紫色の羽をしたバッタです。これは国際価格で二、三万円すると思うのですが、それくらい珍しい昆虫がいます。日本全国昔はたくさんいたのですが、今は絶滅しかけています。河原バッタといいます。羽が青い。河原バッタは、川口だと牛ケ島という所の先端の、十畳ぐらいの大きさの砂地のところにだけいるのです。それから、草原にショウリョウバッタモドキというのがいるのです。これも初めて見る昆虫です。

僕は川口のアトリエに来て、本当にたくさんの生物と知り合いました。今まで東京で仕事をしていて50歳からこちらに来たのですが、東京で仕事をしていたときは、常に何を描こうかと悩んでいました。ここでは悩む必要がないくらい、いろいろな刺激があって、それが全部絵本の材料になる。一人でやっているから、年に４冊くらいしか描けないけれども、あと４本くらい手があったら億万長者です。

僕は子供のころ、川でいろんな生物に出会いました。それが影響して、まずふるさとのチョウチョにすごく興味を持ちました。図鑑には、全国的にいるのに新潟県だけにいない、そういうチョウチョが随分いるので、何とかして自分で歩いて調べてみようということで、昆虫採集に夢中になりました。僕を一番勇気づけてくれたといいますか、将来を決めたのがオオムラサキです。オオムラサキはご存じですよね。日本の国蝶です。日本は紫というのに対して伝統的な敬いを持っているので、この国蝶も紫の綺麗なチョウチョです。オオムラサキはエノキという植物を食べるのですが、新潟県には非常に少ないのです。長岡の森立峠という山があって、その山の下のほうにこれが生えていて、僕は小学校のころ、毎日２時間くらい自転車を漕いで観察に行きました。最終的に採集できたのですが、採集できた時には観察を始めてから半年くらい経っているのです。これを取ったときに非常にうれしくて、体が震えて。採集後に、胸を押してチョウチョを殺すのですが、大きいので押し具合が難しい。強く押したら内蔵が出るし、軽く押したらまた生き返ってくる。その度合いを震える手で一生懸命押したという記憶が残っているのです。

僕は子供の頃から昆虫に夢中になり、世界のチョウチョを捕ってやろうという希望を持ちながら成長したら、いつの間にか絵本作家という仕事になったのです。それも自然をテーマにする。僕は信濃川が好きですし、地元の川がすごく好きです。これからも川を歩いて、雑草を見たり、昆虫を見たりしながら、自分の観察を深めて、感動を子供たちに与えていこうと思います。

⑤　首長サミット

「流域市町村の連携によるまちづくり」をテーマに、参加自治体の代表者から、河川に関する取り組みなどについて発表が行われました。

主な内容は以下のとおりです。

☆　新潟県長岡市　森民夫市長

長岡市は、信濃川火焔街道連携協議会を信濃川流域の４市１町と結成しております。火焔街道は、火焔土器が縄文時代には信濃川流域に分布しており、そこに文化が広がったという証拠であります。縄文文化を巡る「縄文ツアー」の開催など、川を一つの軸とした交流を長年進めております。

それから子供達にも川に親しみを感じてもらうために、鮭の生態の勉強会を行なっています。実際に鮭を川に放流し３、４年後の遡上を目指します「カムバックサーモン事業」というのも展開しています。

また、Ｅボートといいますが、10人乗りのボートレース。これは魚野川、信濃川流域の県内各自治体から参加いただき、みなかみ町の住民の方とも交流を図っているところです。将来には「川の駅」ということも検討していきたいと考えています。

さらに、花火大会は川なくして開催出来ません。長岡市民の誇りである長岡花火大会を一昨日、昨日と無事開催させていただきました。

長岡市は本当に信濃川とともに縄文時代から歴史を刻んできたまちだということで申し上げたいと思います。

☆　福島県湯川村　大塚節雄村長

私どもの阿賀川の対岸に会津坂下町というところがありますが、会津坂下町と湯川村が一緒になって事業をやろうということで、「人の駅・川の駅・道の駅」構想というものをつくりました。３つの駅をひとつのところで一緒にやろうということです。

「人の駅」は防災センターを拠点とした施設、「川の駅」は親水のための施設です。防災センターは、北陸地方整備局のほうで用地の買収が終わりまして、これから事業に取り掛かるところです。また、親水施設は、北陸地方整備局が護岸をそれに合ったような護岸に作っていただいている状況です。そして「道の駅」というのは、どこにでもあるような道の駅ですが、二つの自治体が一緒になってやっているというのは少ないのではないかと思います。

そういうことで、湯川村は、両町村が川を利用することで地域の発展につなげていこうという構想で事業を進めているところでございます。

☆　茨城県取手市　藤井信吾市長

私は、３年前のみなかみ町のサミットから継続して参加させていただいております。川というものについては二つの側面があると思っています。これは、上流から最下流まで川には繋ぎ目がないということです。ずっと繋がっているということが一つだろうと思います。それからもう一つ、川に関しては、治水、利水、その他いろいろありますが、先程の発表にもありましたように、川はいろいろな可能性を持っていて、特に生き物との出会いということもあります。そういう中で、あらゆる可能性があるということで、領域が一つのところに定まらないということが、一つの大きな特色かと思っております。そういう中で、これを契機に川繋がりでいろいろな方々たちと出会いたい、そして知り合いになりたいということで、お隣にいらっしゃいますみなかみ町と友好都市協定を結びました。例えばラフティングとか、矢木沢ダムで船に乗ったりとかさせていただいて、子供たちの教育面でも大きなご指導を賜っております。

それから、取手から下流側の銚子に至る１９市町村のほうで「利根川舟運・地域づくり協議会」というのを作り、舟運の可能性を試していきながら、お互いの交流を深めるといったような事業もさせていただいているところでございます。

今後は防災の観点から、また一層いろいろと研究をしていきたいと思っております。

☆　群馬県みなかみ町　岸良昌町長

みなかみ町も観光のまちでございまして、年間 300 万人の方が訪れていただき、110 万人の方にお泊まりいただいています。何とかこれを増やしていきたい、最盛期の宿泊 200 万人を目指していきたいと思っているところです。そんな関係で、いろいろな交流があるわけでございますが、取手市さんには大変お世話になっております。市長も今月末には３日お泊まりいただけるそうですし、親子ラフティング等々で多くの方々に訪れていただいております。

先ほど長岡の市長さんからお話のありました E ボートについては、関越地域連携協議会等を通しまして、みなかみ町も今年 E ボートを買わせていただきました。今後さらに活用していきたいと思っているところです。

☆　東京都江戸川区　多田正見区長

江戸川区は、２３区の一番東に位置し、千葉県との県境にある区であり、面積５０平方キロ、人口６８万人がひしめいているところです。東京は海がありますが、６区が海に面しており、江戸川区はその一つということになるわけで、大変水に恵まれた区です。そうした水辺の環境を活かし、さまざまな事業を進めているところです。今、話のありましたみなかみ町長さんにも、上流のまちとして大変お世話になっていまして、みなかみ町の皆さんとの交流もあります。

また、水と緑に恵まれた自然豊かな都市ですので、こうした特徴を大いに活用し、こらからも皆さん方のお力をいただきながら発展を続けていきたいと思っております。

☆　岐阜県白川町　今井良博町長

私どもは、名古屋市が下流の一番大きな都市でありますから、やはり名古屋とこれからもう少ししっかりとしたお付き合いをしていかなければならないと思っています。

今、利根川のほうは随分交流が始まっていますが、中部地方においても木曽川、飛騨川、長良川、揖斐川、普段の交流がいざというときに役立つのではないかということを、つくづく思っているところです。

私ども水源の里連絡協議会というものを行っておりますが、上流は下流を思い、下流は上流に感謝するという気持ちを常々からみんなで持てるような、そういう地域づくりをしていくことが大事だと思います。

それぞれの自治体のことは自治体の長が責任を持ってやることでありますが、それだけではすまないなと思っています。それで、自治体を越えることは県がやる、県を越えることは国がやるというようなことではなく、民間の方たちを含めて地域住民すべてがそういうかかわり合いの中で生活をすることが大事だと思いました。具体的なことは申し上げませんが、私どもＥボートや、カワゲラウォッチングというのをやっています。ぜひ、これからも積極的に川を中心としたまちづくりに取り組みたいと思います。

☆　兵庫県加古川市　樽本庄一市長

まずは、昨年第１９回全国川サミットを加古川で開催させていただきました。皆さん方にはお忙しい中ご出席いただきまして、誠にありがとうございました。盛会のうちに終わりましたことを、改めて感謝を申し上げたいと思っております。

私ども、平成６年に加古川流域の７市１０町で東播磨流域文化協議会を設立しました。今は平成の大合併で８市３町になっておりますが、川だけではなくて、私ども日本一のため池を持っております。このため池、そして瀬戸内海といった川を利用したいわゆる水辺の空間を、住民の皆さんや流域全体の人の共有財産としていろいろな事業を展開しております。

また、観光協会と一緒になり、上流の地域の人たちの山の幸を楽しみ、下流の地域の人たちの企業等の産業観光を行うツアー等を実施しております。また、神社仏閣が非常に多いのですが、各々の市だけの神社、仏閣では、京都、奈良のように面的なものがありませんので、それを結んで寺、神社のツアーも実施しております。これは大手旅行会社のツアーにもなって、非常に好評を得ているところです。

市民の皆さんは河川敷を利用してのスポーツ面、また、防災道路を利用してのマラソン大会、また、川を利用してのレガッタ競技など、親水性を求められますが、この雨の被害、台風の被害等、我々行政としましては治水、利水の面も十分考えた施策をこれからも進めてまいりたいと考えております。

☆　秋田県横手市　佐藤良吉副市長

河川愛護団体の活動と特徴的なところを何点かお話申し上げます。

一つは堤防を活用した紫陽花回廊です。堤防上に紫陽花を植えていこうという活動を数年前からやっています。これは株主ということで、自分で植えた紫陽花はずっと自分で管理します。誰かに管理をお願いするのではなくて、自分が自分の子供として、ずっと管理するやり方でやっています。次に千本桜です。ＮＰＯ法人が河川堤防を活用しています。桜千本というのは例えで、今は百数十本になっていまして、なんとか続けてやっております。それから、冬のかまくらです。河川敷にミニかまくらと言いまして、小さいかまくらを数千個作ります。これもまた幻想的で、最近好評をいただいています。あとは小学校では水辺の楽校ということで、水辺に親しめる教育、それから中学校ではサケの卵を漁協から譲っていただいて、ふ化をさせて春に川に放流するという活動も行なっております。そして４０年も前から年に１回、市民によって川のクリーンアップが行われています。

そういうことで横手市民が川を大事にしている、愛しているということが言えるのではないかと思います。

☆　岐阜県揖斐川町　大江雅彦部長

上下流連携の切り口で事例を紹介しますと、まず今年で24回目を迎えます揖斐川マラソンがあります。大会の運営に住民が積極的にボランティアとして参加することにより、まちの魅力を発信し、ランナーや観光客、住民との交流が図られ、地域の活性化、地域の連帯感の醸成といったことに大きな役割を果たしています。

次に、下流域の皆さんと次世代を担う小中学生が一緒になり、木の実を苗木に育て、植樹する活動です。あるいは企業と連携して、企業の社員と地域住民が一緒になって除間伐を行うという取り組み、さらには森林資源の循環利用ということで、特に林業と建設業とが連携をして森林整備を行うとか、それから間伐材を有効活用する取り組みを行っております。また、昨年名古屋でＣＯＰ１０が開催され、それを契機に木曽三川の流域自治体が参画をし、流域自治体連携会議を立ち上げました。昨年は２９の自治体により「森川海の水でつくる命」をテーマに、流域自治体宣言を出しました。今後、８月末には流域自治体のシンポジウムや１０月のビジネスフェアということで、上流域の農産物の生産者と下流域の商社、卸売り業者のビジネスマッチングを行うことも予定されております。

いずれにしましても、流域自治体、そしてそこに住む住民がお互いの状況を理解して、相互に連携してまちづくりを進めていくことが大変重要であると認識しております。

☆　長野県川上村　土屋智則課長

長野県の川上村から、今回この川サミットに初めて参加をさせていただきました。初めての参加であるにもかかわらず、再来年、このサミットを開催する会場地ということで、昨日の総会で決まりました、そんな川上村でございます。

「絆、連携」という今日のテーマでございますが、二つ申し上げたいと思います。

一つは横の連携、一つは縦の連携というふうに仮に表現させていただきます。横の連携というのは、源流同志の連携でございます。千曲川、信濃川の源流は、甲武信ヶ岳の山麓から湧き出ているわけですが、同じ甲武信ヶ岳を源流とする水に、埼玉県秩父市から流れ出ている荒川、それから山梨県の山梨市から流れている笛吹川がございます。この甲武信ヶ岳を囲む三市村で甲武信源流サミットを、今年で５回目になりますが開催しております。このサミットが続いているという所以は、同じ悩み、それから共通の課題を抱えている地域であるということだと思います。この三市村が集まってサミットを開くことによって、そこからいろいろな発見であるとか、発想であるとか、時には新しい事業というようなものが生まれているという状況です。

二つめの縦の連携ですが、上流、下流の交流ということです。私が源流地域ということでこのサミットの出させていただけるというのも、上流、下流の交流と考えています。

☆　新潟県新潟市　篠田昭市長

新潟市は、日本一の大河信濃川と、信濃川に継ぐ日本第２位の水量を持つ阿賀野川という二つの大河が日本海に注ぐところに位置しております。江戸時代中期までは、阿賀野川が信濃川と一緒になって日本海に注いでいました。大変すごい光景だったろうなと思いますが、そのときの新潟は北前船の最大寄港地ということで、大繁盛しておりました。同時に、日本海だけではなく信濃川、阿賀野川、河川の部分についても、当時は河川交通がいちばんでありましたので、両水系の各地域と深い関係があったということです。

新潟は最下流に位置していますので、中流域、上流域の方が森を守り、川の水をしっかりきれいにしていただく、そのことによって生きていけるということで、流域連携は非常に大事だと考えています。２００４年には河川流域連携フォーラムを開催して川上村長さん、長野市長さん、田島町長さん、今は南会津町さんでしょうか、会津若松市長さんから参加いただきました。２００６年度には、阿賀野川流域連携フォーラムに会津若松市長から参加をいただき、２００９年には川上村で開催された千曲川・信濃川源流シンポジウムに参加させていただきました。常に、中流域、上流域の方に、我々は感謝をして暮らしていく必要があると考えています。

☆　新潟県小千谷市　谷井靖夫市長

平成１４年度に上流のダムが計画中止になったということがあり、それを契機に、信濃川水系利水対策市町村協議会ができました。これは、流域の市町村で水利権をどのように調整するかということを目的にしてできた協議会ですが、できた当時は３４市町村、今は市町村合併が進みまして１０市町村になっておりますが、こういう自治体間での協議が始まったわけです。

結論から申し上げますと、小千谷市の場合は水利権が以前は８５パーセントが安定水利権、１５パーセントが暫定水利権ということで、これは言うまでもなく、水というのは生活にも非常に重要でありますし、農業、商業、工業、あらゆる産業にも重要なものでありますので、１５パーセントの暫定水利権というのは非常に、まちの将来の計画にとって一つの不安材料であったわけです。おかげさまでこの協議会の協議の結果、１００パーセント安定水利権ということにしていただきました。これは言うまでもなく流域の市町村の理解や互助の精神によるものであります。この安定水利権を１００パーセントいただきましたものを、今後、まちの発展に大いに利用していきたい。大切な資源として活かしていきたいと思っているわけです。

☆　新潟県燕市　鈴木力市長

燕市は、大河津分水路の役割をしっかり市民の方々に理解してもらう必要があろうということで、小学校の社会科の時間に大河津資料館に必ず見学に行くということを行ったりしながら、大河津分水路の意義を市民の方々に理解してもらうことに取り組んでいます。

さらには、水路というものを観光にも活かそうということで、現在の可動堰の周辺に、大河津分水桜公園というものを整備し、これを観光の拠点にしていこうと考えています。そして、公園には桜のオーナー制度というものを始めました。それぞれ寄付を募り、それぞれの桜のオーナーになっていただき、整備費を削減し効果的にやっていこうと取り組んでいます。

今年は、長岡もやっておりますけれども、燕市を舞台にした映画も撮られて、大河津分水路もロケ地になったということです。今後も観光資源に活かしながら、連携を図りながらやっていきたいと思っています。

☆　新潟県津南町　上村憲司町長

津南町は、日本の中で最も多雪、いわゆる雪が一番多く積もる町でもあります。それであるがゆえに、湧水がとても多く湧き出ている町でもあります。津南町には名水百選に選ばれた毎分３０リットルという湧水がわく、竜ヶ窪という池もございます。そういったことから、津南町で生産される米、あるいは野菜というものは、生活雑排水がほとんど一滴も混じらないピュアな水で生産されております。

信濃川の最上流に位置する町として、農地の保全に意を注ぐ、下流地の皆様方に少しでもいい水を供給したいがために、まじめに取り組んでいる町でもあります。

【全体総括】新潟県長岡市　森民夫市長

皆さんに、ほかの自治体の発表をお聞きになったうえで、今後力を入れていきたいということを一言ずつ発表いただきたいと思います。

（津南町　上村町長）

自ら育み育てるといった川づくりを念頭に置く必要があると考えております。

（燕市　鈴木市長）

産業を含めて大河津分水の川を活かした観光。産業観光も含めた観光に力を入れたいと思います。

（小千谷市　谷井市長）

観光というものに信濃川を使っていければと思います。

（新潟市　篠田市長）

信濃川流域、阿賀野川流域の農産物をまず我々が消費すると。そして、世界に売るという第１号として、川上村産の高原レタスを中国、ロシアに輸出する取り組みを頑張ります。

（川上村　土屋課長）

水源域を扱う源流の里として、何とか森林を含めて、水源域をしっかり守っていきたいと思います。

（揖斐川町　大江部長）

森林の資源、それから清流の揖斐川を住民全体で守っていきたいと思います。

（横手市　佐藤副市長）

食と農にこだわったまちづくりをしていますし、これからもやっていきます。

（加古川市　樽本市長）

母なる河・加古川を想って、地産地消を進めておりますし、これからも進めたいと思っております。

（白川町　今井町長）

「水源の里の恵みいっぱい 活力ある人たちが暮らすまち」を目指していきます。

（江戸川区　多田区長）

知恵と力を出し合って、お互いに支え合っていきます。

（みなかみ町　岸町長）

水源を守っていきたいと思います。

（取手市　藤井市長）

取手から銚子に至るまでの川文化というものを発信していきたいと思います。

（湯川村　大塚村長）

川を使った米作りというものを今後伸ばしていきたいと思います。

（長岡市　森市長）

上流下流との絆を今まで以上にしっかり繋いでいきたいと思います。

⑥　サミット宣言・サミット旗受渡式・次期開催地あいさつ

長岡市立川口小学校の４年生が「第２０回全国川サミット in 長岡　共同宣言」を読み上げ、参加自治体及び信濃川流域自治体の代表者とともに川の恵みを後世に引き継ぐことを宣言しました。

続いて、会長から、次期開催地の茨城県取手市長にサミット旗が手渡されました。

川口小学校では川口の川について学んでいます。
「川の綺麗さ」について調べた結果、綺麗であることがわかり、これからも綺麗な川であるように気をつけていきたいと発表いただきました。

共同宣言文を力強く読み上げる
川口小学校のみなさん →

次年度開催地の茨城県取手市長にサミット旗が引き渡されました。

第２０回全国川サミット in 長岡　共同宣言

信濃川は、長野県、山梨県、埼玉県の県境にある甲武信ケ岳を源としています。長野県では千曲川と呼ばれ、新潟県に入ると信濃川と名前を変え、広大な越後平野を流れ日本海に注ぐ日本一長い川です。

「第２０回全国川サミット in 長岡」は、大河信濃川と清流魚野川の合流する長岡市川口地域を会場に、「絆～川は流れ、地域をつなぐ」をテーマに開催しました。

地域の文化を育み、市民の憩いの場となっている川の恩恵を再認識し、これからも川と共生した地域づくりに取り組んでいくことを誓い、ここに宣言します。

○　わたしたちは、みんなが安全に安心して暮らせる、災害に強いまちづくり、川づくりに取り組みます。

○　わたしたちは、未来を担う子供たちが川に関心を持ち、自然に親しむ心を育める、「川に学ぶ」社会を目指します。

○　わたしたちは、流域自治体と地域住民が力を合わせ、川が有する観光資源や地域の創意を活かした広域交流に取り組みます。

○　わたしたちは、たくさんの生き物と豊かな自然が息づく川づくりと、みんなが親しめる環境づくりに取り組みます。

○　わたしたちは、川が人をつなぎ、地域をつないでいることを確認し、川を愛する人々の友好の輪を広げます。

平成２３年８月４日

第２０回全国川サミット in 長岡参加者一同

⑦　展示等

えちご川口交流体験館「杜のかたらい」において、パネル展を実施しました。
掲示したパネルは、参加自治体紹介パネル・国土交通省信濃川河川事務所提供パネル・新潟県長岡地域振興局地域整備部提供パネル・事例発表団体紹介パネル・自然科学絵本作家松岡達英氏の原画展などです。

参加自治体紹介パネル

国土交通省信濃川河川事務所提供パネル

新潟県長岡地域振興局地域整備部提供パネル

自然科学絵本作家　松岡　達英 氏 パネル

Ⅲ　第２０回全国川サミット in 長岡を振り返って

今回のサミットでは、“絆 ～ 川は流れ、地域をつなぐ ～”のテーマのもと、さまざまな企画を行いました。

１日目は、川に関する施設見学を行い、日本一の大河信濃川を車中からご覧いただきながら、越後平野を水害から守る「大河津可動堰」を見学していただきました。また、長生橋下流を会場とする「長岡まつり大花火大会」をご覧いただき、川を生かしたまちづくりの一例であり、長岡市民の誇りである大花火を紹介することができました。

２日目のサミットでは、川口地域に代々継承されている「川口あおり太鼓」の勇壮で躍動感溢れる演奏に始まり、川に関する事例発表、基調講演、首長サミットが行われ、川をテーマにしたお話を様々な視点から聴くことができました。川に関する事例発表では、「ＮＰＯ法人新潟水辺の会」からは、河川環境を鮭が遡ってこられる環境に戻すために行っている活動を発表いただき、「大地の会」からは、川がつくる大地について、また地質を理解することで防災に役立てようという取り組みを発表いただきました。

基調講演を行った自然科学絵本作家の松岡達英氏は、自身で執筆されている絵本の内容や川口地域に住む珍しい生き物について、実際に絵を描いて説明していただきました。川にはいろいろな生物が住んでおり、身近な生物を知るということの大切さを改めて再認識いたしました。

各自治体代表による首長サミットでは「流域市町村の連携によるまちづくり」をテーマに各自治体の取り組みについて、予定時間をオーバーするほど熱の入ったお話をいただきました。川は源流から生まれ、上流・中流・下流と繋がっていることを、この首長サミットで再認識させられました。

第２０回全国川サミット in 長岡参加自治体は、今サミットにおいて採択した共同宣言の実現にあたり、今後も情報交換と連携を深めてまいります。最後に、参加自治体をはじめ今サミットに御協力いただいた関係者の皆様と、次回サミットを開催していただくことになりました茨城県取手市に、心より感謝を申し上げます。